

こうじろしものさこ

神代下廻横穴発掘調査報告書

平成7年（1995）3月

島根県三刀屋町教育委員会

序

三刀屋町は、縄文時代から中・近世に至るまでの数多くの遺跡を有し、歴史と文化財に恵まれた町であります。

なかでも、縄文時代後期の特異な祭祀遺跡とされる宮田遺跡や、中世期の典型的な山城遺構である「じゃ山城跡」等は、県指定文化財として著名であり、かねて本町においては、こうした先人の残した文化遺産の保存と活用に意を用いて来ているところであります。

さて、この度発掘調査を実施した下迫横穴は、島根県木次農林振興センターによる農道新設工事（飯石地区広域営農団地農道整備事業）の中途に偶然発見された、古墳時代後期の遺跡であります。この遺跡の取扱については、発見の状態や事業の性格等を勘案し、また島根県教育委員会のご指導も得て、発掘調査による記録保存に留めることにしました。

この調査による成果は、質量ともに当初の予想を上回るものであり、当地方における横穴墓の研究と解明に大きく貢献してくれるものと確信しております。

最後になりましたが、今回の調査にあたっては島根県教育委員会、鳥取大学医学部法医学教室、島根県木次農林振興センター、土地所有者、工事関係者、地元関係者等たくさんの方々のご指導、ご協力を頂きました。

関係各位に対し深甚なる謝意を表しつつ、ごあいさつといたします。

平成7年3月

三刀屋町教育委員会

例　　言

1. 本書は島根県飯石郡三刀屋町大字神代地内において島根県木次農林振興センターが実施した農道新設工事（飯石地区広域営農団地農道整備事業）中に検出された横穴の発掘調査記録である。

2. 調査は平成6年7月26日から実施し8月5日に終了した。その際の調査組織は次の通りであった。

調査主体　三刀屋町教育委員会

調査指導　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）

廣江耕史（島根県教育委員会文化課主事）

調査員　板垣旭（三刀屋町教育委員会主任主事）

事務局　若槻喜吉（三刀屋町教育長）

永塚久守（三刀屋町教育委員会教育次長）

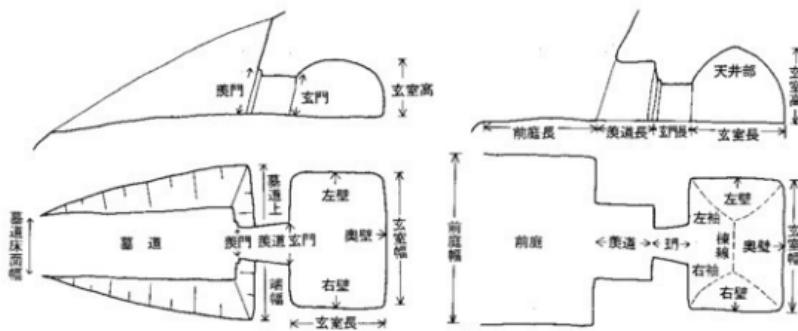
名原定雄（　　同　　教育次長補佐）

陶山隆樹（　　同　　社会教育係長）

3. 本遺跡出土の人骨の分析・鑑定を鳥取大学医学部助教授、井上晃孝先生にお願いした。

また発掘調査に際しては、奥田功、田部美佐男、奥田博、宮崎俊則の諸氏および、株式会社都聞土建に多大な協力を頂いた。記して謝意を表する。

4. 遺物の実測、作図、写真撮影、本文の作成および編集は島根県教育委員会文化課からの助言を得て板垣が行った。



横穴墓模式図と部位名称（島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1984年）

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査の経過	1
第3章 位置と環境	2
第4章 神代下迫横穴の概要	4
第5章 小結	9
第6章 自然科学分析	10

第1章 調査に至る経緯

当横穴は島根県飯石郡三刀屋町大字神代392番地に所在する。平成6年7月19日、島根県木次農林振興センターが実施する飯石地区広域営農団地農道整備事業の工事中に、重機による山腹の掘削作業中によって開口、確認された遺跡である。

連絡を受けた三刀屋町教育委員会は現地に急行し、開口している横穴と内部状況、さらに土地所有者である田邊儀三雄氏について確認した。横穴からは人骨（頭蓋骨）と須恵器（杯片、壺）が確認された。その際、横穴の性格上、周辺にも多数存在していると思われたが、現状の掘削状況から考えて現存している可能性は少ないと判断され、島根県教育委員会文化課と協議、工事主体者である島根県木次農林振興センターと工事施工者である株式会社都間土建に対し工事の一時中止を通知した。そして改めて島根県木次農林振興センターと協議し、発掘調査の必要性について双方の認識の一致を確認し、また公共事業を尊重する視点から早急に調査態勢を整える必要があると判断された。

その後、平成6年7月25日に発掘調査委託契約を締結し、翌平成6年7月26日から8月5日にかけて、三刀屋町教育委員会が島根県教育委員会文化課の協力を得て、発掘調査を実施した。

第2章 調査の経過

神代下池横穴は飯石地区広域営農団地農道整備事業の工事中に発見された遺跡で、現存するものは1基のみであった。見つけだされた横穴はすでに前底部および羨道部のほとんどを工事のため失われていたが、玄室内は天井および壁面の一部が剥落しているものの比較的保存状態がよいものであった。

調査にあたっては人骨が確認されていたため、中軸線と思われる部分を半分残しながら上層の堆積状況を確認をしつつ横穴内の堆積土を慎重に除去しながら進めることを原則とした。遺構・遺物の出土状況の実測図は、原則として1/10の縮尺で行った。また土層図は1/20の縮尺で行った。実測の基準とした標高は工事用のものを使用した。

その結果、完全に堆積土を除去した段階で人骨2体・須恵器19点・銅製耳環2点・鉄鎌数点を検出するに至った。

第3章 位置と環境

下迫横穴は飯石郡三刀屋町大字神代地区に存在し、現三刀屋の街から南へ約9kmはいった山間の地点で、飯石郡吉田村の川手地区と境を接する。本遺跡は、高瀬山（標高445.9m）から南北に伸びる尾根筋の西斜面に穿かれており、現在は田邊儀三雄氏所有の山林である。この地区周辺は三刀屋川の支流である飯石川のさらに支流である神代川が形成する狭い谷合で、その大部分は山林であり、段丘上は棚田として利用されている。

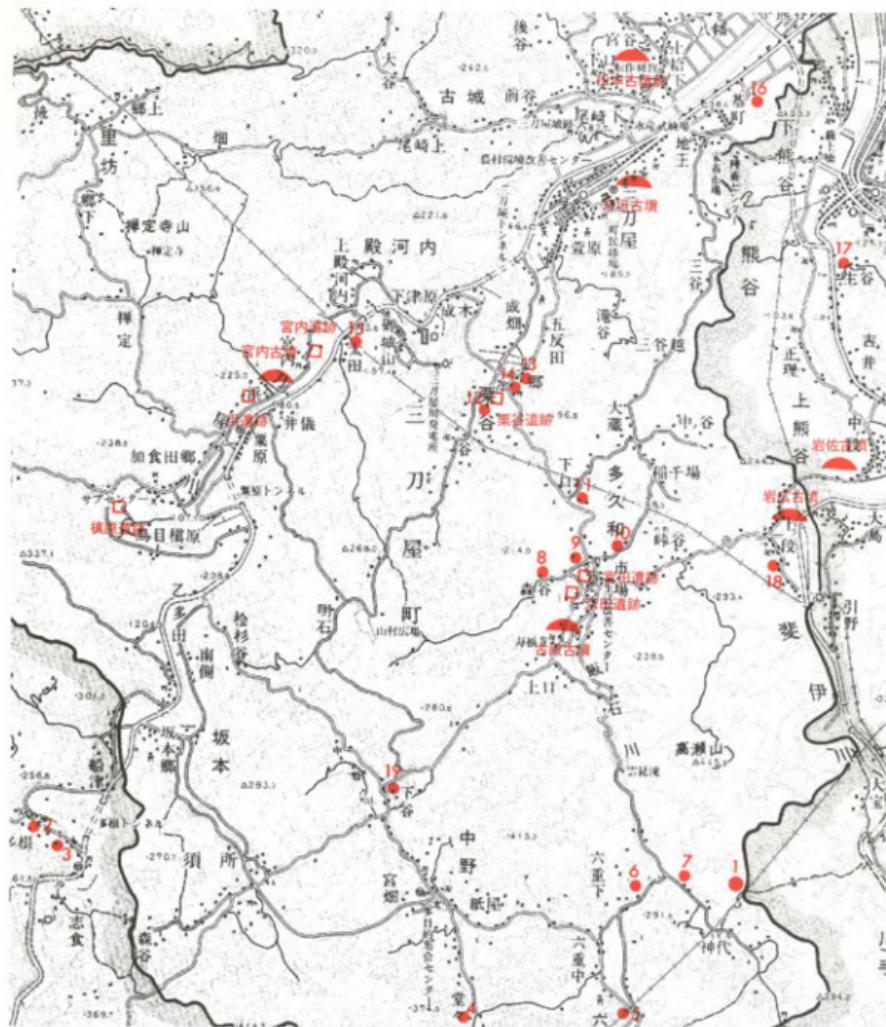
周辺よりは各時代にまたがり、数多くの遺跡が存在する。なかでも飯石川流域に存在する宮田遺跡は縄文時代後期に属する倒立埋甕2個を伴い、大量の石錐をはじめとする石器も検出されていて、縄文時代よりの生活環境や河川での狩猟採集を窺わせる好資料である。

各時代を通じ最も多いのは古墳時代の遺跡であろう。三刀屋町大字給下に存在する松本古墳群は前期大型前方後方墳の1号墳・3号墳を有し、これらは斐伊川流域一帯を支配した有力首長の存在と、当時の勢力圏分布の在り方を示している。

点在する古墳・横穴は大部分後期に属する。松本4号墳・上熊谷の岩広古墳は小規模ながら横穴式石室を持ち土器や鉄器の副葬品を持つ。横穴は山間部に多く分布しており、その数や副葬品の量とも等質的であり、僅かながら装身具や少量の武器、須恵器等を有する。これらから被葬者は各河川段丘を経済基盤とした有力豪族の墓と推定され、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺跡として飯石郡から大原郡、仁多郡にまで広く分布する。



第1図 下迫横穴の位置



第2図 神代下追横穴と周辺の遺跡

S = 1 : 50,000

1. 神代下追横穴
2. 船津横穴群
3. 梅原横穴群
4. 堂々横穴
5. 六重饭石神社境内横穴
6. 六重横穴
7. 神代横穴
8. 森谷横穴B群
9. 森谷横穴A群
10. 大神谷横穴
11. 大倉口横穴群
12. 大年横穴群
13. 栗谷横穴
14. 栗谷横穴群
15. 太田横穴群
16. 要害横穴群
17. 下吉井横穴群
18. 善王寺横穴
19. 東下谷横穴群

第4章 神代下廻横穴の概要

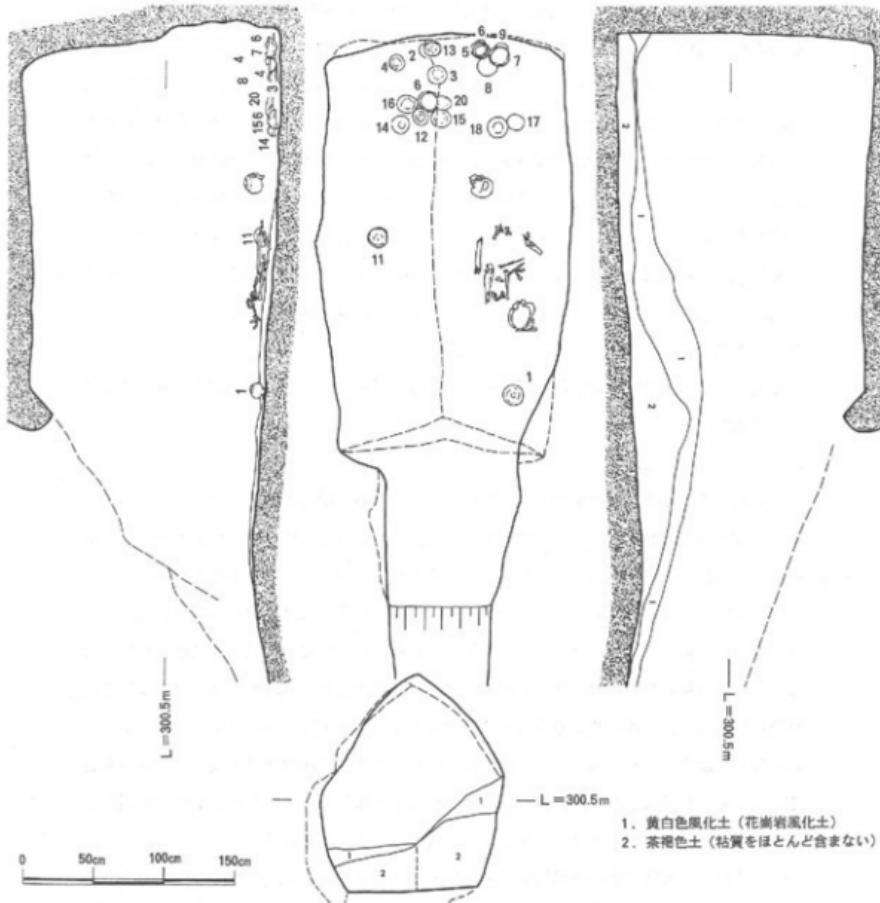
この横穴は工事中の発見のため、前庭部及び羨道部はその大部分が工事のため失われている。しかし玄室内は、天井及び壁面の一部が剥落しているものの比較的保存状態がよいものであった。あたり一面は重機により掘削した地山の風化花崗岩の擾乱土が大量に堆積し、その一隅に羨道部の一部をわずかに残して開口しており、主軸に添って残された全長は4.2mを測る。玄室内は流入土と落盤土が堆積していたが、奥部隅角部に床面の一部が見られた。また、室内南側ほぼ中央部より流入土上において、人頭骨部が首部を下にして立った状態で認められ、この段階で追跡もしくは盗掘に伴い再口された可能性があると判断された。調査はまずこの工事擾乱土を排除し羨道部を現すことから着手した。さらに、玄室内の土は筛にかけながら慎重に排除していった。



第3図 下廻横穴周辺地形図

1. 羨道部

羨道部はその大半を失っているが、幅70~90cmと思われ奥部がやや広い。掘削による落盤土が堆積し、抉り部や溝等は不明である。石材等もなく、流入堆積した粗砂が玄室に向かって傾斜していた。閉塞施設については確認がつかないが、閉塞板らしきものによりその役目を果たし、腐朽にともない上方から暫次砂土が流入したものと思われる。



第4図 下追横穴実測図

2. 玄室部

玄室は床面の幅1.8m、奥行3mのやや同張の長方形プランを呈する。床の横断面は僅かにU字形で羨道部からなだらかに低くなっているがほとんど水平であり、左右両側の壁近くが僅かに高くなる。床面は粗面で若干の粗砂が認められるものの、敷土とするほどではない。他には石類は確認されなかった。また、屍床や排水溝等も存在しない。

玄室内の高さは88cmを測る。側壁部と天井部を区別する界線等ではなく、奥壁の形状などから横断三角形の妻入テント形（四注式系、三角形断面、妻入）⁽¹⁾の横穴である。床面から20~50cmにかけて粘質をほとんど含まない茶褐色土が堆積しており、この土層から人骨、土器等の出土遺物が含まれることから埋葬した後の流入土と思われた。人骨は玄室中央右側のやや奥部から人頭骨が確認され、さらに羨道へ僅かに下がった場所に集骨状に確認された。その中にはやはり人頭骨が含まれることから計2体の人骨が納められていると判断された。人頭骨部の一つを除けば床面からの第1層にあたる粘質をほとんど含まない茶褐色土内から確認されている。さらに10~20cm程度の白黄色土が堆積しており、これは花崗岩の風化土で重機により掘削された際の剥落土であると判断された。

3. 出土遺物

検出された出土遺物は須恵器（短頸壺2個・蓋10個・杯9個）、銅製耳環2個、鉄製品数点である。

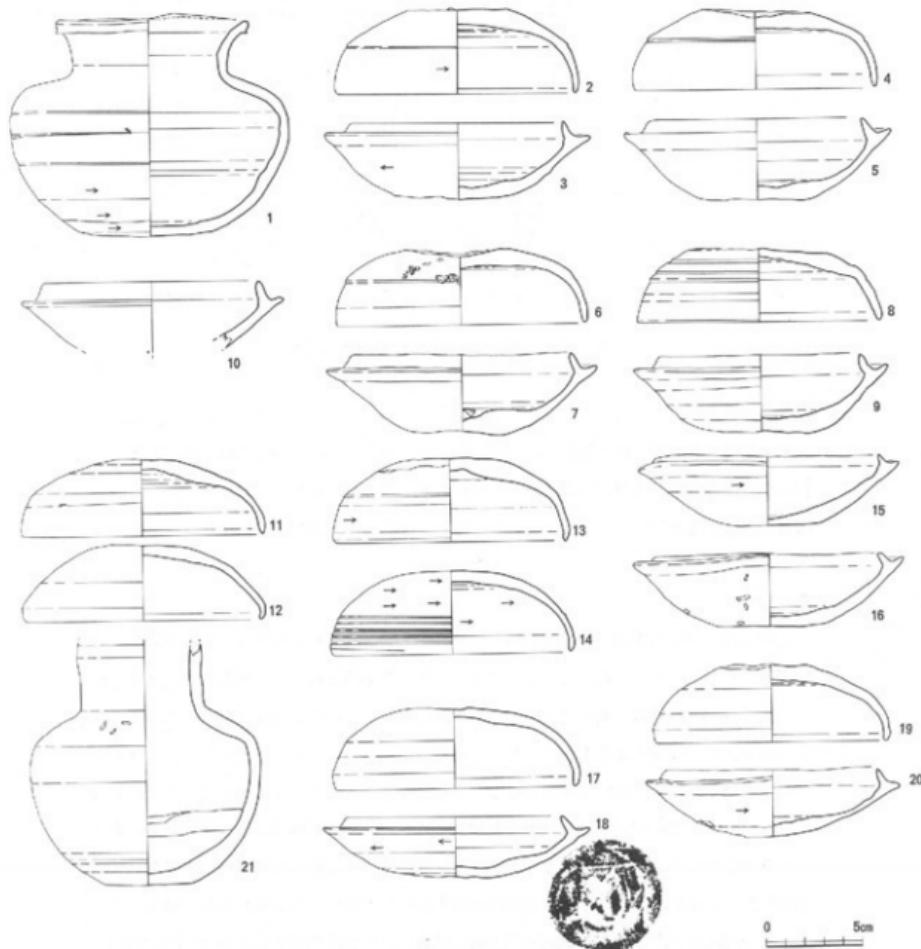
須恵器

須恵器は大きく2時期にまたがって存在する。工事中に検出されたもの（10・21）を除くと、玄室前部右側から短頸壺1個（1）と中央部左側に蓋1個（11）が確認されたほかはすべて奥部に集中して検出された。このうち蓋杯は6個体のセット関係を保つ。

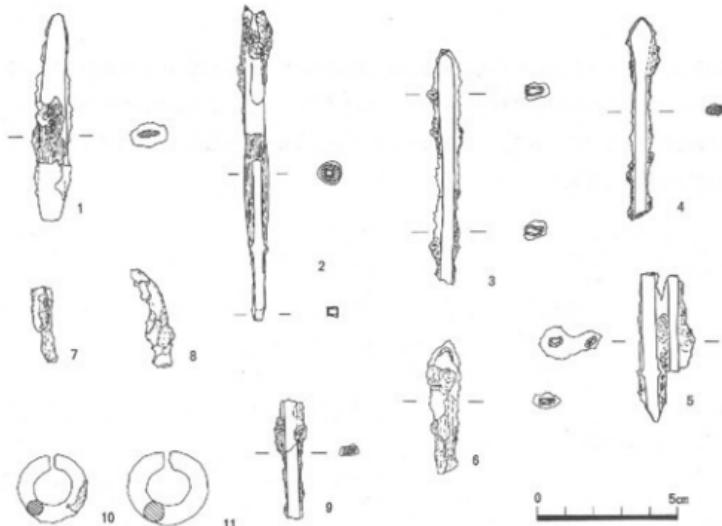
1の短頸壺は口縁部が段により頸部と区切られ、胴部上半には沈線がみられる。底部はヘラケズリを施している。ロクロは左回転であるが、部分的に右回転の砂粒移動が見られる。2~10は基本的には同じタイプの蓋杯である。蓋は外面肩部に削り出すようにして鋭い稜を作り出した2本の沈線を巡らせる。天井部は概して丁寧なヘラケズリを施すが、4と6は天井部を下にして置いた際の格子目痕が見られる。口縁内面には段に近い沈線を巡らせるが6には見られない。杯身は口縁がやや長く内傾して立ち上がり、端部は平坦なものもある。底部はヘラケズリを施す。ロクロはすべて右回転である。

11から21までは創作された年代が若干異なる。11~20の蓋杯は、口径12cm程度の小形品でまとまっており、天井部・底部外面はヘラケズリまたはヘラ切り後ナデ調整を行う。14は外面に削り出すようにして鋭い稜を作り出した5本の沈線を巡らせている。蓋口縁はほ

ば直口、杯立ち上がりは短く内傾する。18の底部にはヘラ記号と思われる沈線が刻まれている。ロクロは18を除いて右回転である。21は口縁部を欠損しているが約6cmを測り、口頸部は直口して立ち上がる。同部最大径がやや上位にあり肩が張る。底部は静止した状態でのヘラケズリを施す。



第5図 下迫横穴出土遺物実測図(1)



第6図 下追横穴出土遺物実測図（2）

鉄製品

鉄製品は玄室奥壁右側に須恵器の蓋杯に密着して検出された。刀子1は刀身が欠損しているが両側に茎には木質が付着する。2は細根式の鐵でかえりがつくタイプである。茎の部分に木質が付着している。3、4、6の鐵は、頭部が長く鐵身は三角形を呈するものであると思われる。

耳環

銅製耳環は玄室内奥部中央から1個と、中央部右側から1個が確認された。通常一人の被葬者より左右両耳に装着されていることからセット関係を保つものであろうと想像される。追葬時の際に最初の被葬者を移動させた際に着脱したものと想像される。1は集骨部から検出され、被葬者が装着していたであろうが年月の推移により着脱したものと判断された。環全体が全面暗褐色に錆化肥厚して表面にはヒビ割れが多く発生している。断面円形であり、直径7.0mmの素材を28.0mmの環状にしたもので短部の隙間は2.8mmを測る。素材は銅質と思われるが表面の鍍金等は不明である。2の出土位置は人骨は検出されていない箇所である。環全体はやはり全面暗褐色に錆化肥厚しており、ヒビ割れが多く発生している。断面楕円形で直径7.5mmの素材を24.0mmの環状にしたもので耳環1よりやや小形である。短部の隙間は2.0mmを測る。素材は銅質と思われるが表面の鍍金等は不明である。

第5章 小 結

今回の調査で確認された下庭横穴の形態は横断三角形の妻入テント形のものであるが、これは近隣地域に通有のもので確認例が多い。三刀屋町内でも太田横穴群^(注1) 東下谷横穴群^(注2) らの報告例がある。また八束郡島根町の宮尾横穴群^(注3) 仁多郡横田町の角・宮ノ峰横穴^(注4) も同タイプの報告例が見られる。横穴はその性格上、独立した1穴のみの存在とは考えにくいが、最近仁多郡内において確認例が見られる。^(注5)

横穴の造営された時期について副葬された土器から検証すると、検出された須恵器は2時期にまたがって存在している。ともに供獻及び枕転用にされた蓋杯と短頸壺の須恵器であり、これらはいわゆる山本清偏年^(注6) のⅢ期、高広遺跡偏年^(注7) のⅠB期と、同偏年のⅣ期及びⅡAに相当するものであり、被葬者は2時期に跨がるものと推察された。法医学的に男性が先に埋葬されていることは第6章、自然科学分析で後述するが、すなわち6世紀末～7世紀初頭にかけてまず男性が埋葬され、同偏年のⅣ期及びⅡAに相当する7世紀初頭～前葉に女性が追葬されたものと考えられる。その埋葬時期の差は、須恵器の偏年によって示される差と、人骨調査により法医学的に確認された年数と一致する。

横穴複数葬の事例は雲南地域では比較的多数検出されており、人骨が残存する場合も多い。角・宮ノ峰横穴調査報告書^(注8)によれば性別による頭位置の指定が論ぜられているが、本横穴においても頭部が奥のほうが男性であり女性は入口側であり、横穴の埋葬習慣についての論拠を裏づけている。

以上、今回の調査について概述してみた。当横穴は工事中の確認のためその地形のほとんどを失している。今後開発事業に伴う慎重な協議と十分な分布調査の重要性について一石を投じる調査となつた。

参考文献

- 注1 門脇敏彦「山陰地方横穴墓序説」(古文化談叢) 1980年
- 注2 三刀屋町教育委員会「太田横穴群発掘調査報告書」1982年
- 注3 三刀屋町教育委員会「東下谷横穴群発掘調査報告書」1984年
- 注4 島根町教育委員会「宮尾横穴群」1990年
- 注5 横田町教育委員会「角・宮ノ峰横穴」1994年
- 注6 山本清「山陰の須恵器」(島根大学開学十周年記念論集) 1960年
- 注7 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1994年

第6章 自然科学分析

神代下廻横穴出土人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

井 上 晃 孝

I. はじめに

島根県三刀屋町所在の神代下廻横穴墓内には、集骨状にまとめられた人骨が2体埋葬されていた。

玄室中央部を大きく開け、右側中央部に成人男女2体分相当の頭蓋骨、下頸骨、四肢骨の骨が集骨状に混在していた。

集骨状の骨を、採取時に、骨の形態学的特徴から、男性骨（1号人骨）と女性骨（2号人骨）に識別しながら、採取した。骨の遺残性は、2体ともやや不良であった。

以下、1号人骨と2号人骨について、骨の遺残性、遺残骨名、推定性別、年令、身長、その他について述べる。

II. 1号人骨

1. 骨の遺残性

遺残骨が少なく、完形の骨がなく、遺残状態は不良である。

2. 遺残骨名

1) 頭蓋骨 大きく破損、骨片化

左側頭部～頭蓋底部、右側頭骨の一部と左右上頸骨の一部

下頸骨 左右の下頸枝欠

歯牙

$\times 7$	6 ff		$1 \text{ ff} \quad 3 \quad 4 \times 6 \quad 7 \times$
$\text{ff} \quad 6 \times 4 \quad 3 \quad 2 \times$			$\times 2 \quad 3 \quad 4 \quad 5 \quad 6 \quad 7 \times$

○：遊離歯牙 ×：死後欠

ff：欠損部位

2) 上肢骨

上腕骨：右；下端部のみ

桡 骨：左；下端部のみ

右；上端部のみ

3) 下肢骨

寛骨：左；脛骨の大半

左右不明：脛骨稜の一部

大腿骨：左；下端部破損、423mm

右；骨体中央部のみ

3. 推定性別

完形の骨はないが、遺残する頭骨、下顎骨と四肢骨は、かなり大きく頑健で筋付着部の粗面の発達がよいことから、男性骨の特徴を具備しているので、男性と推定する。

4. 推定年令

遺残骨が少ないが、頭骨の一部；下顎骨の形状と歯牙の咬耗度から、壮年中期（20代後半～30代前半）位が推定される。

5. 推定身長

遺残する四肢骨に完形の骨がないので、身長は不詳であるが、左大腿骨は下端部が脆弱で破損していたが、現場での推定計測値は423mmであるので、ピアソン法¹⁾で160.7cm、藤井法²⁾で159.4cmである。そこで本屍の身長は約160cm位と推定する。

6. その他

遺残骨をみる限り、特異的骨折、損傷と疾患の形跡は認めない。

III. 2号人骨

1. 骨の遺残性

骨の遺残は1号人骨（♂）よりやや良いが、完形の骨はない。遺残状態はやや不良である。

2. 遺残骨名

1) 頭蓋骨 ほぼ完形に近いが、頭頂部、上顎部と頭蓋底部一部欠

下顎骨 左下顎部のみ

歯牙



×：死後欠 JJ：欠損部位

2) 脊椎骨

頸椎骨：第2頸椎骨

胸椎骨：No.不明の椎骨2ヶ

3) 胸郭骨

肋 骨：左右の肋骨片若干

4) 上肢骨

鎖 骨：左；ほぼ完全に近い、115mm

肩甲骨：左右；骨片

上腕骨：左右；骨体中央部のみ

橈 骨：左；骨体のみ

尺 骨：右；骨体のみ

5) 下肢骨

大腿骨：右；上下欠

脛 骨：左；上下欠

右；下端欠

腓 骨：左右；骨体部のみ

顎 骨：右；一部欠

3. 推定性別

頭蓋骨、下頸骨の諸形状と四肢骨が全般的に小さくきゃしゃであることから、女性と推定する。

4. 推定年齢

頭蓋冠の縫合、歯牙の咬耗度からして、壮年後期～熟年前期（30代後半～40代前半）位が推定される。

5. 推定身長

完形の四肢骨がないので、推定身長は不詳である。がしかし、本屍の骨は小さく、細く、きゃしゃであるので、小柄な女性が推察される。

6. その他

本屍の遺残骨をみると限り、特異的骨折、損傷と疾患の形跡は認めない。

IV. 考 察

1. 被葬者の埋葬時の原位置について

1) 1次埋葬

1号人骨（♂）と2号人骨（♀）の骨の遺残状態からみて、1号人骨の方が古く、先に埋葬されたと推測される。

1号人骨（♂）の頭位は、玄室右奥（A地点）の須恵器（山陰須恵器編年曆^{3), 4)}

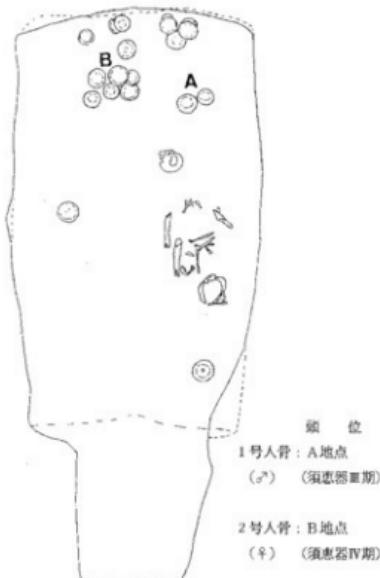


図1. 神代下廻横穴の一次埋葬の推定原位置

Ⅲ期)を枕にして、足位を玄室入口に向けて仰臥伸展位で埋葬されたと推定する。

2号人骨(♀)は、1号人骨(♂)に比べて、骨の遺残性がやや良いことから、
2号人骨のほうが追葬されたと推定する。

2号人骨(♀)の頭位は、玄室中央部(B地点)の須恵器(IV期)を枕にして足位を玄室入口に向けて仰臥伸展位で埋葬されたと推定する。枕の下の須恵器の所から耳環が検出されたことからも、原位置が推察される。

2) 2次埋葬

2号人骨が白骨化後、被葬者の祭祀に当って、玄室中央部を広く開ける必要性にかかるがみ、被葬者的人骨を人為的に集骨状にまとめて、2次埋葬されたと推察する。

2. 埋葬順序

1号人骨(♂)は全般的に骨の遺残が悪い。先に埋葬された可能性が高い。副葬品の須恵器がⅢ期であることからも推察される。

2号人骨(♀)は1号人骨(♂)に比して、骨の遺残性はかなりよく、上、下肢骨が遺残、比較的消失し安い肋骨片も若干遺残している。そして、副葬品の須恵器はIV期である。

以上から、1号人骨(♂)が先に埋葬され、次に2号人骨(♀)が追葬されたと推察する。

V. まとめ

島根県三刀屋町所在の神代下追横穴墓には集骨状にまとめられた成人男女2体が埋葬されていた。

1号人骨は♂、推定年令は壯年中期(30才前後)、推定身長は約160cm位である。
遺残骨に特異的骨折、損傷と疾患は認めない。

2号人骨は♀、推定年令は壯年後期～熟年前期(40才前後)、推定身長は不詳(恐らく小柄な女性)である。遺残骨に特異的骨折、損傷と疾患を認めない。

埋葬順序は1号人骨(♂)が先に埋葬され(須恵器Ⅲ期)、次に2号人骨(♀)が追葬された(須恵器IV期)と推察する。

2号人骨が白骨化後、祭祀の際、人為的に両被葬者の骨が集骨状にまとめられたと推察する。

両被葬者は夫婦関係が思料される。

表1 神代下追横穴出土人骨 2号人骨(♀)の頭骨計測値

マルチンNo	計測項目	数値
1	頭蓋最大長	165.0
8	頭蓋最大巾	131.0
8／1	頭蓋長巾示数	0.79
9	最小前頭巾	87.8
10	最大前頭巾	92.0
11	両耳巾	108.3
12	最大後頭巾	105.4
13	乳突巾	95.0
43	上顎巾	98.6
44	両眼窩巾	94.2
50	前眼窩間巾	24.2
51	眼窩巾	左 35.0 右 34.0
52	眼窩高	左 34.3 右 35.5
52／51	眼窩示数	左 0.98 右 1.04
54	鼻巾	25.8
55	鼻高	52.0
57	鼻骨最小巾	6.5
57-1	鼻骨最大巾	20.4

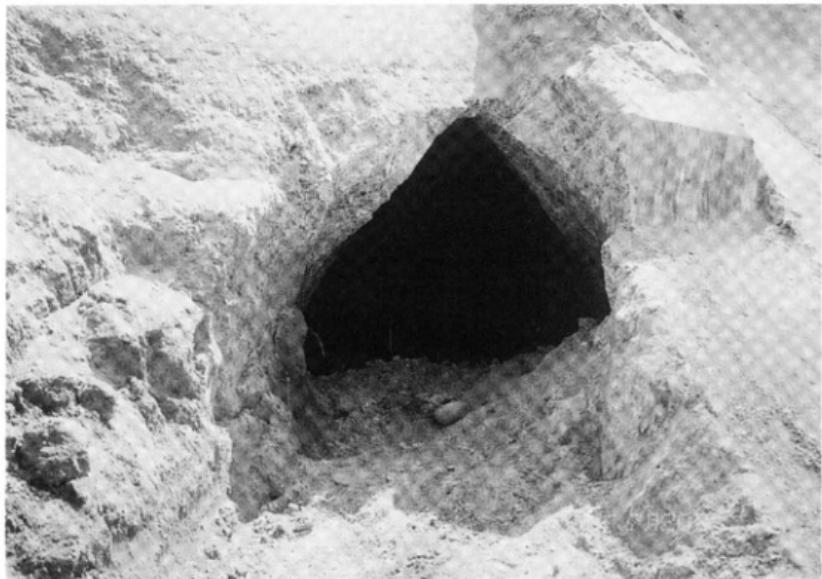
文 献

- Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution. V.
On the reconstruction of stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc.
London. Ser. A. 192, 169-244
- 藤井 明 (1960) : 四肢長骨の長さと身長との関係に就て、順天堂大学体育紀要3,
49-61
- 山本 清 (1960) : 山陰の須恵器、島根大学開学10周年記念論文集
- 山本 清 (1962) : 横穴の形式と時期について、島根大学人文科学論集11

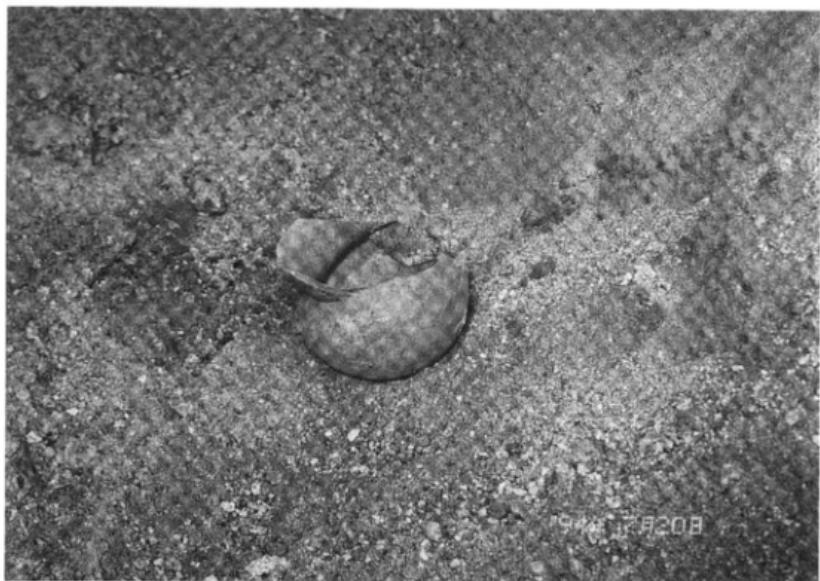
図 版



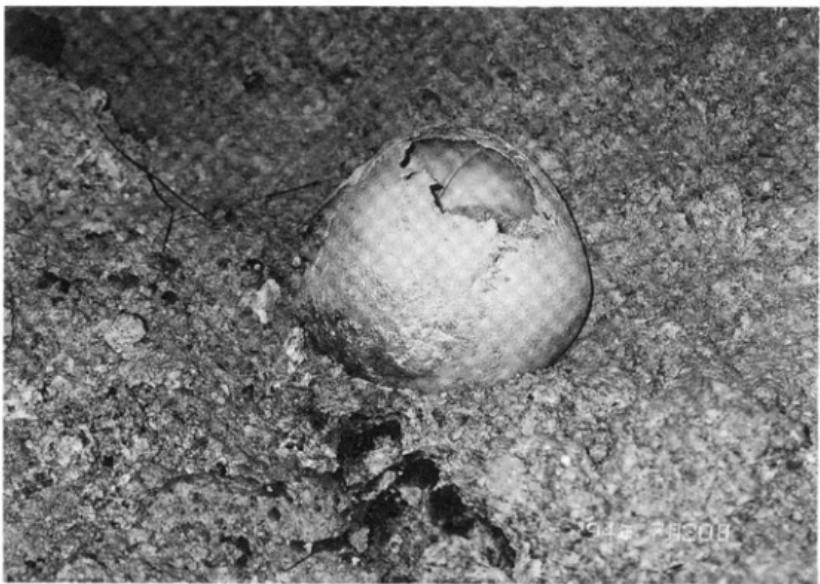
神代下廻横穴遠景



神代下廻横穴（開口直後）



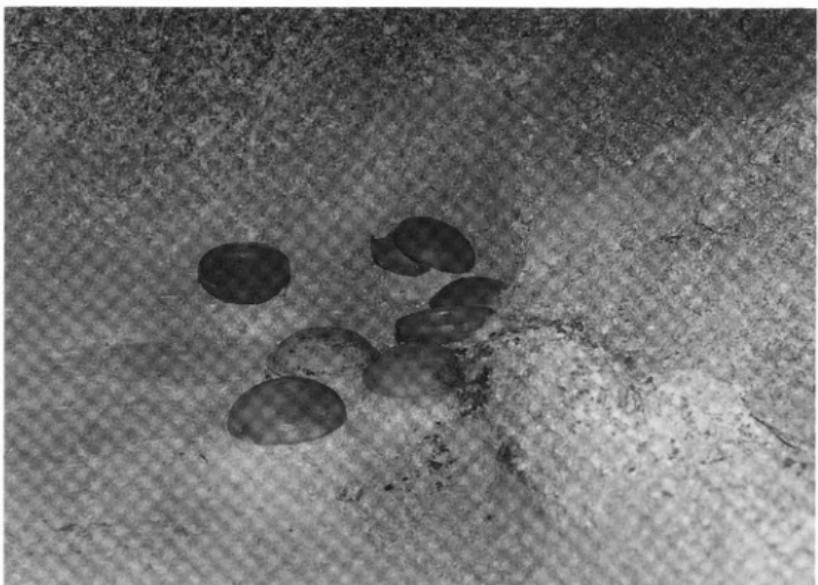
横穴出土土器



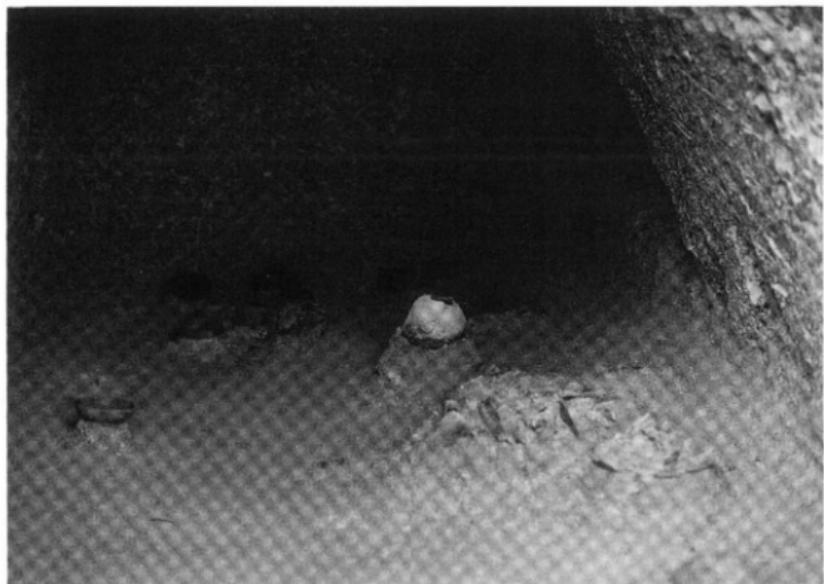
横穴内出土人骨



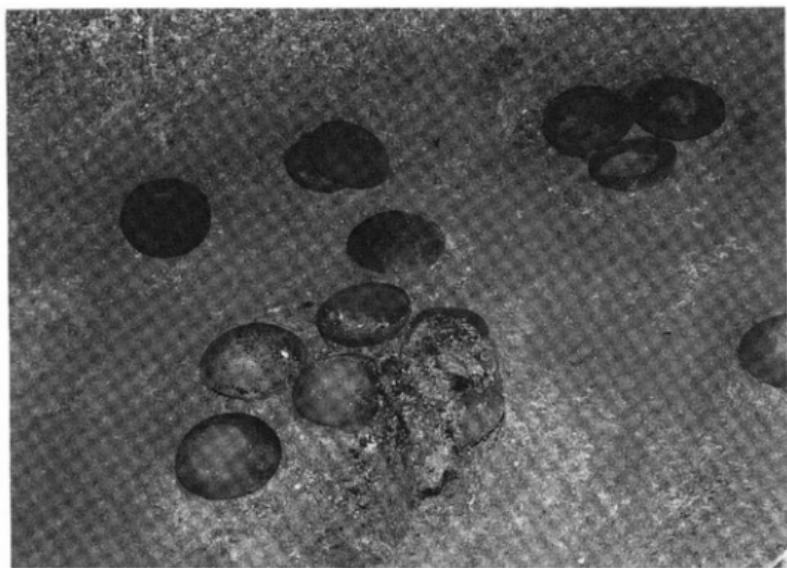
横穴内土砂堆積状況



横穴内出土土器



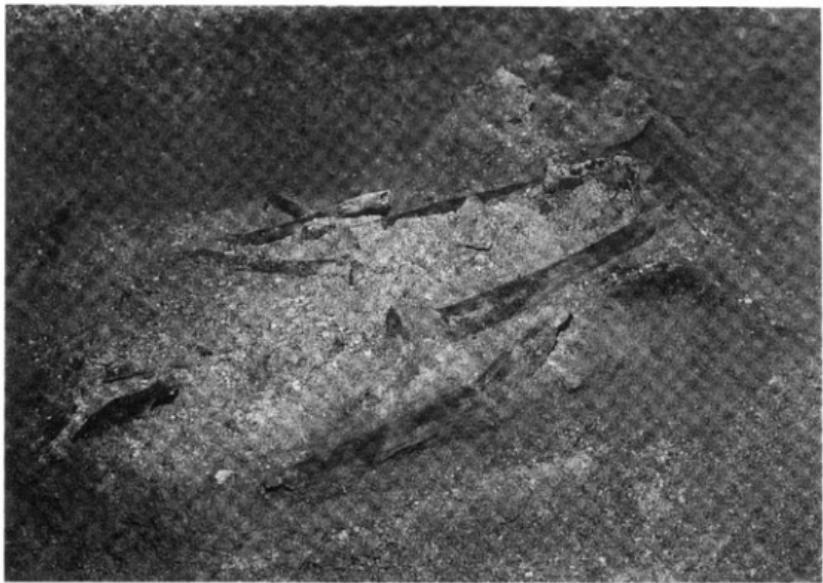
横穴内人骨及び遺物の出土状況



横穴内土器出土状況



横穴内出土人骨



横穴内出土人骨



1



12



2



13



4



14



6



17



8



19



11



21

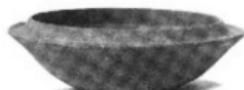
出土遺物 (1)



3



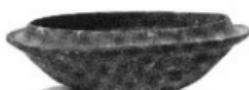
15



5



16



7



18



9



20



耳環



鉄器



1号人骨(1)

頭蓋骨片



上顎齒牙



下顎骨

1号人骨(2)

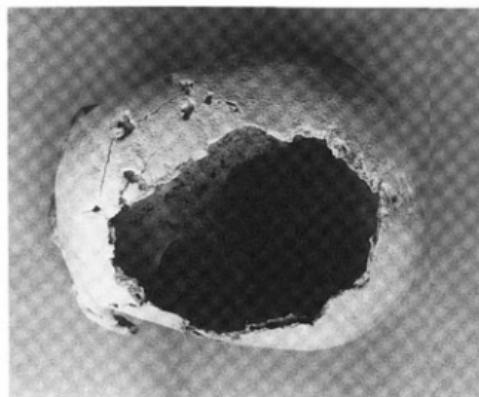
左脛骨



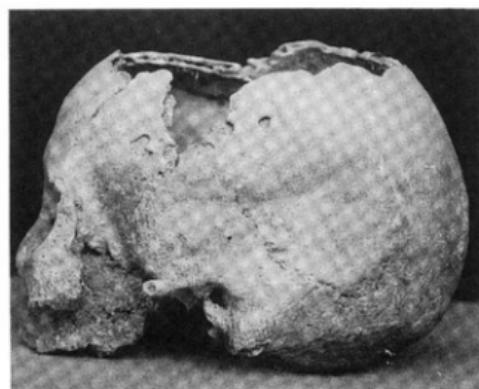


2号人骨(1)

頭蓋骨正面



頭蓋骨頭頂面



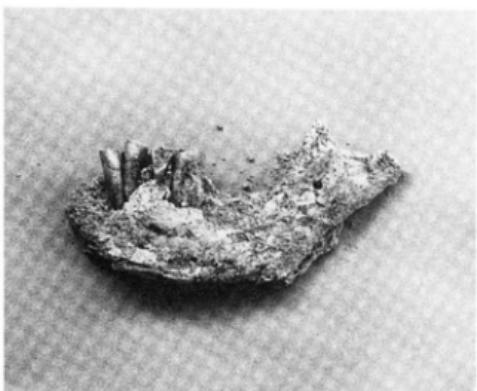
頭蓋骨左側頭面

2号人骨(2)

頭蓋底面



下頏骨



神代下廻横穴発掘報告書

発行 1995年3月

編集 三刀屋町教育委員会
飯石郡三刀屋町三刀屋944

印刷 松栄印刷有限会社
松江市西川津町667-1

